

一以上、長々と引用したが、色々の国境がたち表われてくる時、その土地にいわゆる日本の、国境を越えて別の国境へはいり込む日本人が外国にいった時、どうなるかの問題は始末が悪い。むずかしいのである。その国境を緩めるのが文化ではないか。いや文化しかないように思うのは間違いであろうか。厳密に言えば文化の国際化というのであろう。唐突ではあるが、偉大な作家、哲学者は、人生のすべてを語っている。例えばプラトンにせよ彼には国家論があり、ジョン・ケージはいう、もはや牢獄は必要ないと。そしてICは協力して、テロ臨時法でフランスは差別政策を強めたにもかかわらず、IC間においては法的には殆んど国境をなくした感がある。鳥が空を飛ぶのにパスポートがいらないよう、所詮、国境とは人間が作った垣根で、日本において封建制が示すように、それは消滅さすべきものだ。そして、青山マミ先生は現代の解放者として「いまや、われわれは国家を論じなければならぬ」と語り、やがて、それば実体となり具体的行動、即ち芸術化へと道を敷くことになるのであろう。青山マミ先生のように生きることが、生きることの実体が夜に対して昼、空を支える大地、生きることが汚れであるとすれば、眠ることは浄化して昼の活動にそなえる、自然の活躍なのだ。いま、画家は、美術家は、いや文化に、文化を創造しようとする人々は、この現在を認識する必要がある。すでに産業革命のペースとなった巨大産業、蒸気機関車はすでに亡びさって思い出としてしか残らず、また石油、三池炭鉱の最盛期に誰が現在のガス中毒・死者に500万円とは、いま、誰れしも若しそれが自動車事故で死ねば軽く2~3,000万円は常識であるのに、かつての巨人はいま、まさに消えさろうとしている。そして、また八幡製鉄といえば九州ではエリート中のエリートであった。国の中枢基幹産業であった。それが鉄ビエという、なにか子供の風みみたいな名前がついて、ダンダン衰弱していまや北九州は人口まで減り、活性化を叫んで大騒ぎである。

産業は確かに重要である。国家は確かに重要である。国境は重要であるのかもしれない。しかし、イマヌエル・カントがすでに言っているように、それらの産業または、封建国家は、いや、カントは、そこまで言うてはいないが、「野蛮人のぶあいそな例と、我が大陸の文明国、特に商業国の非人間的な行為とを比較するがいい、これらの文明人が外国の土地と人々とちょうど最初に接触した時、実際に行なった不正は、我々を恐怖で一杯にする。こんな人々は単に訪問を受けただけでも、彼らには、征服されたと同じに思えた。アメリカ、黒人諸国、スパイス諸島、喜望峰などは発見された時には、誰にも所属しない国として扱われた。というのは土着の住民は全く計算に入れられなかったから……。そうしてこれらはすべて敬神に大きわざをして、罪悪を水のように飲み干しながらも、自ら正教の真の選民と見なしてもらいたい国民によってなされたのだ JP53 西洋哲学物語 (F) デュラント・村松正俊訳、講談社文庫これでも判るようにカントによって、すでに植民地主義の罪悪はすでに見すかされていたのである。同じ人種、同じ国民の中で、当時、まだ封建時代、1724年生まれだから263年前にすでに見抜いていた。哲学美術・文化はこうありたいものである。